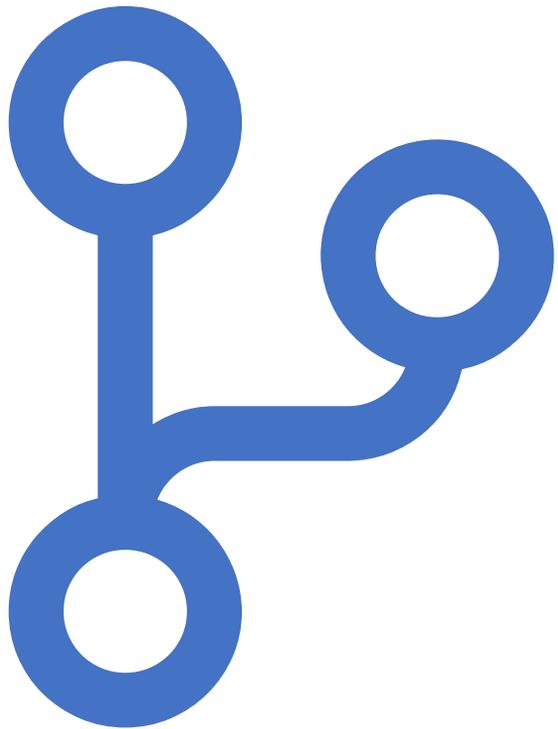


# バリエーションソースの サービス一覧



# サービス一覧

- 当社のサービスは、システムの要件を明確にし、既存のシステムを理解しやすくするためのものです。このために、私たちは「RDRA手法」という特別なアプローチを使用します。この手法は、システムの構造と機能を視覚化することで、システムの要件を迅速かつ効率的に特定し、開発プロセスの品質を向上させます。
- さらに、RDRA手法を学ぶための1日セミナーを提供しています。このセミナーは、ただ座学するだけではなく、実際に手を動かしてRDRA手法を学ぶことができる実践的な形式です。また、私たちは要件定義や既存システムの視覚化をサポートするサービスも提供しており、クライアントがRDRAモデルを使用して自ら要件定義やシステムの視覚化を行うことができるようにサポートします。
- このサービスは、システムの要件を正確に把握し、既存システムの理解を深めるために役立ちます。また、RDRA手法を学ぶことで、システム開発プロセス全体の品質と効率が向上します。

分類	名称	内容
セミナー	RDRA 1日セミナー	オフサイトでRDRAを使った要件定義を演習形式で実施します 手を動かしながらシステムを形にする考え方や表現方法を学びます
コンサルティング	要件定義支援サービス	1 2回の打合せでRDRA手法を使った要件定義を支援します Google Spreadsheetを使い機械的に不整合を検出し、グラフィカルに要件を分析します
	既存システムの可視化サービス	既存システムを分析する手法を説明し、最終的にRDRAモデルとして表現します 様々な状況に応じた手法を使い確実にシステムを可視化します

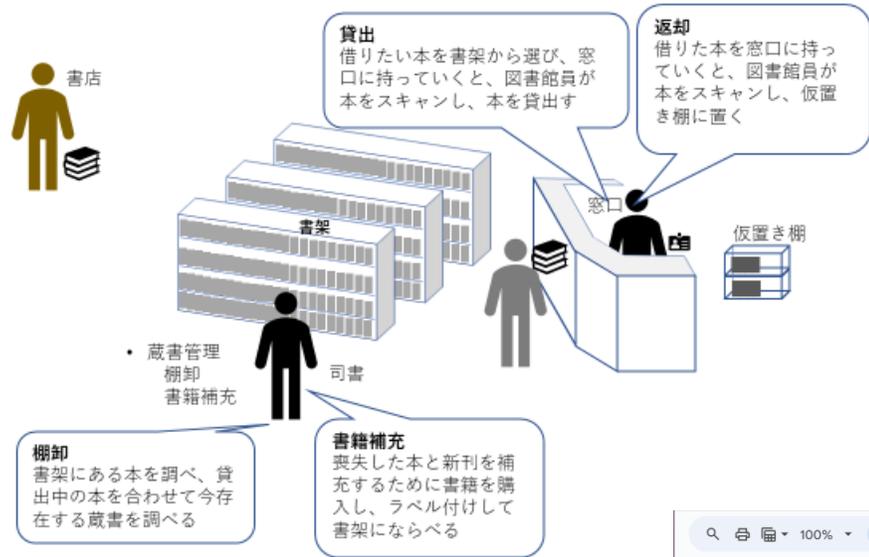


# RDRA 1日セミナー

RDRAを使って要件定義を行う方法を  
説明

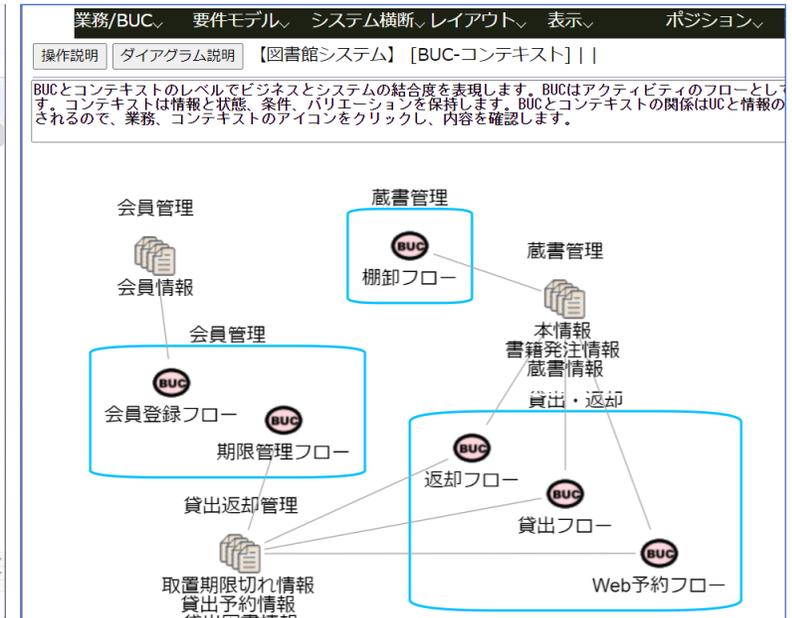
# RDRA要件定義セミナー

## 私立図書館（中央図書館）のIT化



- 内容
  - 演習形式でRDRAの考え方を手を動かしながら理解します
  - 最初にRDRAの基本的な考え方を説明し、その後でStep-By-StepでRDRAの定義を行いながら、要件を定義する手法を学びます
  - 図書館システムを題材に左記の概要からツールを使って要件を定義
- 実施形態
  - 1日6時間
  - オンサイト形式
- 費用
  - 料金：40万円（税別）
  - 出張費：10万円（税別）

A1	業務	BUC	先	アクティビティ	次	UC	関連モ	関連オブジェクト	関
1	貸出・返却	貸出フロー		書架から本を探す	↓		画面	貸出登録画面	アクター
2				蔵書を貸出す		蔵書の貸出を登録する	情報	貸出図書情報	アクター
3							情報	蔵書情報	
4							情報	貸出予約情報	
5							条件	貸出制限条件	
6									
7									
8		Web予約フロー		貸出予約	↓	貸出本の予約・取消をする	画面	蔵書検索画面	アクター
9							画面	貸出予約画面	アクター
10							情報	蔵書情報	
11							情報	貸出予約情報	
12				予約図書準備	↓	予約図書一覧を出力する	画面	貸出予約一覧画面	アクター
13							情報	貸出予約情報	
14							条件	貸出予約一覧出力条件	
15							情報	貸出予約情報	
16							情報	蔵書情報	
17							画面	貸出準備登録画面	
18							イベント	貸出可能通知	アクター



# 費用とご用意いただく物

- セミナー費用

- 期間：1日 6時間
- 費用：400,000円（税別）
- 出張費100,000円（税別） 札幌以外で実施の場合
- 実施人数15名まで

- 実施形態

- 3名1組のグループワーク
  - 1台のPCを3名で使用し、議論しながらRDRAのモデルを作成（一人1台でも可）
  - Google SpreadSheet（推奨）

- ご用意いただくもの

- ホワイトボード
- プロジェクター
- グループ毎のPC
  - Googleのアカウントの取得（Google SpreadSheetの場合）



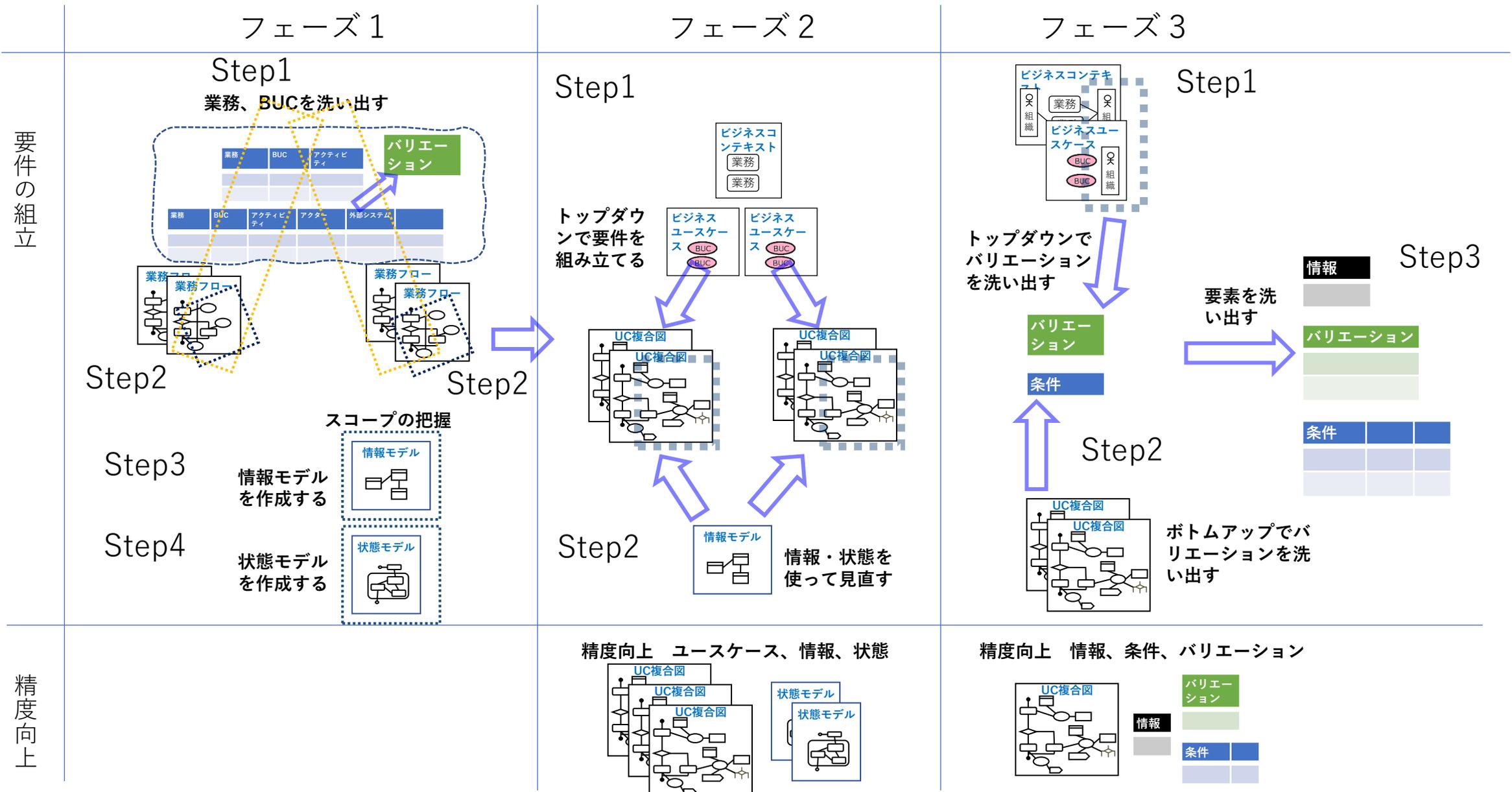
# 要件定義支援 サービス

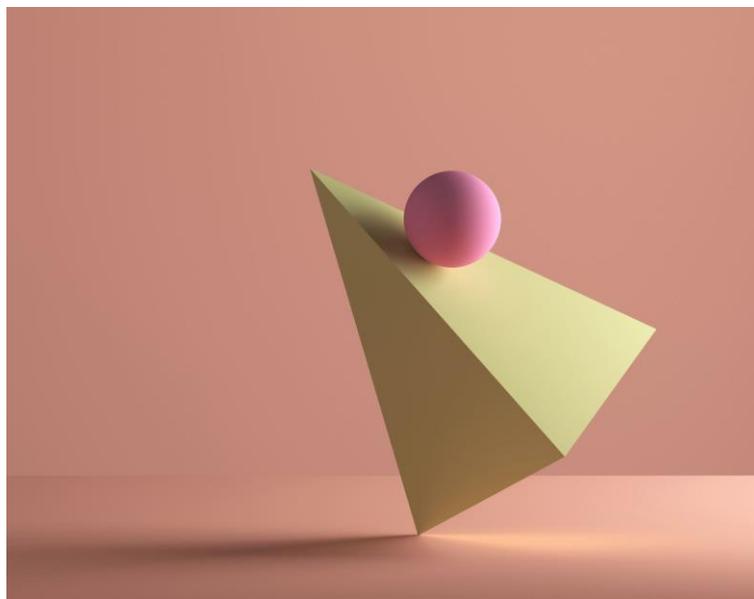
# フェーズ別組み立て

- 各フェーズを実施するときの状況と、その結果の状況を示すことで、各フェーズの意味を理解する

	Step	状況認識	作業結果の状況
議論のベースを作る	1：業務、BUCを洗い出す	最初の段階ではプロジェクトメンバー間の合意事項はなく、表現しようとしているシステムのスコープも定まっていない ⇒まずは議論可能なベースを作る	業務、BUCが可視化されることで、システム化対象の業務スコープが明らかになり、議論の対象を指し示せるようになる
	2：スコープの把握	業務の分類（業務、ビジネスユースケース、アクティビティ）が見えてきたところで、システム境界を検討する。 ⇒業務をベースにすることでシステム境界（ユースケース）の議論がブレズに進めることができる	ユースケースが可視化されることで、システム化スコープが見えてくる。 既存の入出力の位置づけも明確にできる
	3：情報モデルを作成する	ユースケースでシステム境界が見えているが、まだ具体的な処理イメージがわいていない状況である。 ⇒扱う情報を洗い出すことでシステムが行うことをイメージする	ユースケースと情報が見えてくることで、システムが行うべきことが見えてくる
	4：状態モデルを作成する	情報が見えているが、それらの情報をどのように活用するかが見えていない状況である。 ⇒情報がとりえる状態を明らかにすることで、システムが実現すべきことが見えてくる	仕事は状態を認識しながら進めるので、その状態が見えることで、システムと仕事の関係性が見えてくる
要件の形を作る	1：トップダウンで要件を組み立てる	ユースケースでシステム境界が見えるので、そこに入出力（画面、イベント）と操作する情報を結びつけ、場合分けがある場合に条件によって明示する。 ⇒この作業を繰り返すことでシステム化すべき要件が明らかにする	システム化スコープが明らかになり、一通りの要件が見えるようになる
	2：情報・状態を使って見直す	情報のライフサイクルから関わるユースケースを見直す ユースケースを状態遷移に対応付け抜けているユースケースをみなおす	ユースケースの精度が向上することでモデル全体の精度が向上する
ビジネスルールの明示	1：トップダウンでバリエーションを洗い出す	ユースケース、情報、状態は見えてきたが、ビジネスルールは明らかになっていない状態 ⇒ビジネスコンテキスト、ビジネスユースケースのビジネス要素を明らかにし、そこからバリエーションを導き出す	ビジネスルールを構成する軸となるバリエーションが見えてきた
	2：ボトムアップでバリエーションを洗い出す	ユースケースが明らかになることで、システムとの接点が明確になり、そこでの入出力と情報が見えてきたが、個々のユースケース独自の条件は見えていない状態 ⇒ユースケース毎の条件とバリエーションを洗い出す	ユースケースに関わる条件も見え、細かいビジネスルールが見えてきた
	3：要素の洗い出し	情報やバリエーション、条件が洗い出されているが、具体的な要素までは見えていない ⇒洗い出されたバリエーション、条件の要素を洗い出す。	バリエーション、条件の要素も見え、仕様化につながる粒度まで見えてきた

# RDRA推進手順イメージ





# 既存システムの可視化 支援サービス

# 既存システムを可視化するための視点

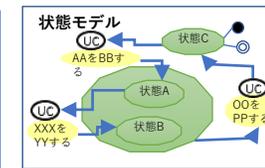
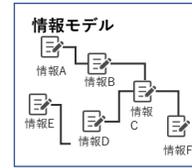
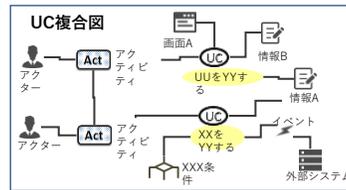
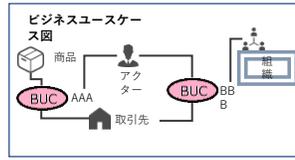
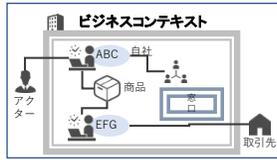
- 既存システムの可視化は、その目的によって2つに分かれる
  - ToBe開発に向けた可視化
  - 保守開発に向けた可視化
- システムの可視化は大きく3つに分かれる
  - 業務を理解する
  - システムの機能を理解する
  - ビジネスルールを整理する
- プロジェクトでヒアリング可能な人によって進め方が変わる
  - 対象システムを開発した人がメンバーに居る
  - 対象システムの使い方を理解した人がいる
  - 対象システムの業務を理解した人がいる

可視化の目的		
	ToBe開発に向けた可視化	保守開発に向けた可視化
方針	ToBe検討に必要最低限の整理を行う	保守品質を上げるために行う 網羅的に各々の関係者の詳細な資料と紐づけられる内容で整理する
説明	ToBeの要求に応じてAsIsの扱いが異なるので、後で調べられるようにインデックス的に整理する	システム化関係者が共有できる要件レベルで全体俯瞰できるように整理する

把握対象			
対象	業務を理解する	システムの機能を理解する	ビジネスルールを整理する
説明	業務とBUCを洗い出し、関わるビジネス要素を整理し対象を理解する	UCを洗い出し入出力を整理することで、システムの機能を把握する	バリエーションとUCを洗い出し、そこに結びつくるビジネスルールを整理する

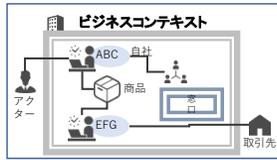
プロジェクト状況			
状況	対象システムを開発した人がメンバーに居る	対象システムの使い方を理解した人がいる	対象システムの業務を理解した人がいる
説明	開発者が比較的信頼がおける <b>開発時の資料</b> を主として活用し、補助的に他の資料を使う	<b>入出力（画面、イベント）に関わる情報</b> を集め、ボトムアップでUCとしてまとめる	トップダウンで <b>業務、BUC</b> の階層化で分析を進める

# 既存システムを目的別可視化のイメージ

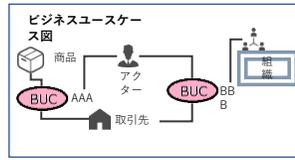


- ToBeの要求に応じてAsIsの扱いが異なるので、後で調べられるようにインデックス的に整理する

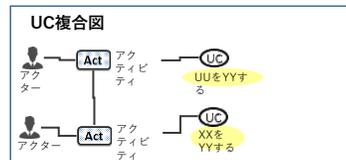
ToBeに向けた可視化



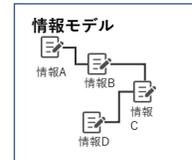
- 網羅的に業務とビジネス要素を整理
- ToBeの議論の広がりのために業務を網羅的に出す



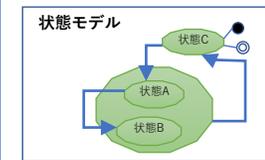
- 典型的なBUCを洗い出す
- BUCと関わるビジネス要素との関係を把握する



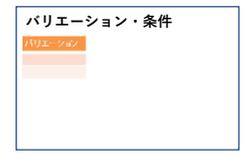
- BUCとビジネス要素との関係から仕事の手順としてアクティビティを出す
- システム化するところにUCを追記する



- UC複合図までを作成する中で把握した、情報を表す言葉を構造化する



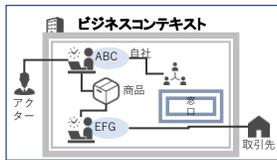
- UC複合図までを作成する中で把握した、状態を表す言葉を構造化する
- 遷移にUCを当てはめない



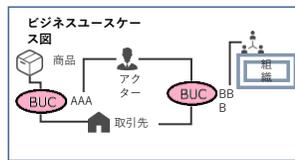
- ビジネス要素を中心にバリエーションを整理する

- システム化関係者が共有できる要件レベルで全体俯瞰できるように整理する
- 企画、サポートなどの各部門の詳細な資料につながる接点をもつ

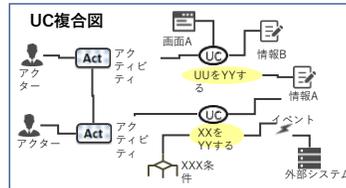
保守開発に向けた可視化



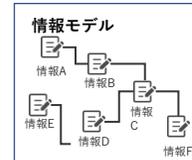
- 網羅的に業務とビジネス要素を整理



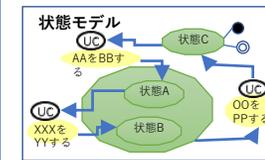
- 網羅的にBUCを記述する
- BUCとビジネス要素との関係を明示し、関係部署との接点を明確にする



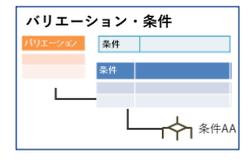
- BUCとビジネス要素との関係から仕事の手順としてアクティビティを出し、現場作業と突き合わせて整理する
- システム化するところにUCを追記し、画面、イベント、情報を接続する
- 状態モデル、条件などつなげて精度を向上させる



- UC複合図までを作成する中で把握した、情報を表す言葉を構造化する
- UCにつなげて網羅的に情報を整理する



- UC複合図までを作成する中で把握した、状態を表す言葉を構造化する
- 遷移にUCを当てはめ、UCの精度を向上させる
- 情報からID管理するものを取り上げ状態の



- ビジネス要素を中心に網羅的にバリエーションを整理する
- 条件も洗い出しUCにつなぐ
- 条件につながるバリエーションを全て出す

# 支援内容と費用

- 概要
  - 可視化作業そのものはお客様に行っていただき、1 2回の打合せでGoogle SpreadSheetを使ってRDRA手法で可視化します
  - 初回に対象システムの概要と関連する資料の説明を受け、以後の進め方を提案、毎回の打合せの進め方、定義内容などをリードし、確実に1 2回の打合せでシステムの枠組みが把握できるレベルで可視化します
- 内容
  - 形態：ビデオ会議による打合せ
  - 方法：1 2回の打合せによる可視化支援、3ヶ月のメールフォロー
- 方法
  - 1 2回の打合せを週1回または2回で実施
  - Google SpreadSheetでシステムの可視化を支援
- 成果物
  - Google SpreadSheetによる可視化
  - 成果物例：[クラウドサービスの定義例](#)
- 費用
  - 150万円/1回（1 2回の打合せ＋3ヶ月メールフォロー）
  - 以後の追加作業は1回の打合せ毎の費用計算となり、10万円/1回の打合せ